

## JSCA 指導者検定会 北九州会場 報告書

報告者：阪井雄司（チーフ IT）

教養課程：2017 年 11 月 27～28 日 北九州市立玄海青年の家

基礎課程：2017 年 11 月 29～30 日 北九州市立玄海青年の家、頓田貯水池

担当 IT：阪井雄司（アクロス瀬戸内カヌースクール）

：中村昭彦（一滴 Paddle & Mountain Guide）

主管：西胤正弘（カヌースクール九州）

研修：青木 勇（RaC カヌースクール）/IT

：庵 経弘（H2O アドベンチャー）/IT

：嘉藤暖博（ブルーホリック）/IT

：西胤正弘（カヌースクール九州）/IT

：本橋洋一（サニーコーストカヤックス）/SK2（IT 申請中）

デモ：今野正幸（屋久島カヤックツアー-KAZE）/SK2

見学：飯山達哉、近澤清、関谷周作、末永直樹、砂田絵里

### 教養課程担当

・総論：中村昭彦      ・カヌーギア：嘉藤暖博      ・フィールド：庵 経弘

・技術論：阪井雄司      ・救急法：中村昭彦      ・セーフティ：西胤正弘

### 基礎課程担当

漕艇技術：阪井雄司、中村昭彦

指導技術：阪井雄司（指導論、模擬講習）、中村昭彦（模擬講習）

受験者数：教養課程 9 名、基礎課程 8 名（シーカヤック）

合格者数：教養課程 9 名、基礎課程 4 名

### 教養課程

できるだけ講習経験が偏らない方が良いであろうという観点から、今回は IT 研修として参加予定であった 3 名にも教養課程を担当してもらった。5 名の IT で分担して行った為それぞれの IT の個性が出て、受験者には変化のある講義になったと思われる。セーフティでは、パワーポイントを使用することにより動画や画像によるインパクトのある伝達が行われ、板書のための時間ロスがなくスムーズな講義がなされた。カヌーギアではカヤック・カヌーの現物を見ながらの講義でシーカヤック以外の艇の特徴などが的確に伝えられた。その他の講義でも、ファーストエイドキットや、パドルなどの現物を使って興味をわかせる動きのある講義をしようという試みが多く見られた。その反面、講義内容を深めたり、伝えたいことを正確に伝えるには時間的な余裕がないという声も上がった。

総論では、公認校に所属しないインストラクターのマーク規定の解釈についてグレーゾーンを残さず明確な説明が必要である事が確認された。

## 基礎課程

### 漕艇技術

検定員以外の IT と IT 研修者にも研修として採点を行ってもらい、種目ごとに目合わせを行いながら進めた。また、3人目まで採点した後で目合わせを行うことで、時間短縮になった。雨の中の検定となり受験者は寒かったと思うが、風は微風で検定条件としては悪くはなかった。

カヤックの経験や準備期間の長さが成績に現れていたと思われる。課題の理解ができていたのか疑問に思われる受験者もいて、今後は、事前講習の重要性や、検定ガイドラインを分かりやすく伝えることも必要である。

水上フィードバックでは、サイドスリップとターンの2種目に絞って行った。単に技術の伝達ではなく、各自の体の使い方、パドルの使い方、艇の動きなどを振り返り考えてもらいながら、より良い感覚をつかんでもらうようにした。

### 指導技術

#### 指導論

できるだけ受講者に考えてもらう講義にしたつもりだが、後半は重要項目を伝えるので精一杯だった。もっと具体例を取り入れたり、ワークショップ的な手法で指導手順などの実習をする時間を組み入れたかった。学科では珍しく50点という方がいたが、その他の方は満点や高得点の方もいたので、概ね講義内容は伝わっていたと思う。

### 模擬講習

初心者の VTR を何度か見てスキル指導の4ステップをメモし、それを発表し、お互いの分析、原因究明、プログラム作成などを知る。それを何回か繰り返した後、VTR を見ながら実際の指導の要領でスキル指導の4ステップを行ってもらった。

段階が進むごとに課題を明確にしたり、最後の1回が検定なのか、全体が検定なのかということをもっと明確にした方が良かったかも知れない。

### IT フィードバック

毎日、全課程終了後に IT、研修 IT、IT 申請者が集まりフィードバックを行った。実施者、見学者がそれぞれ振り返ることで、今後への課題が明確になった。また研修 IT 等の理解度を押し量ることもある程度できたと思う。

### 中村所感

東日本会場に続き8名と多くの参加者がありました。各地の公認スクールがスタッフトレーニングや検定対策のための講習で練習を積み重ねていたようで、非常に良い状態まで仕上げておりました。

但し、練習時間が短かったり思うような実力を発揮できなかった方もいました。

協会としても、出来る限り早めの日程を出し、十分な内容の告知をし、準備をしっかりできるような環境を整えていくことが今後の課題と感じました。

## 阪井所感

IT研修以外にも多くの見学者が参加していたことで、教養課程での参考意見等のバリエーションが増え講義に膨らみが出た。

パワーポイントなどを取り入れることなど、時間短縮を図ることも今後の課題ですが、講義時間の見直しも必要かも知れない。